

## 平成25年度の国際教養の取り組み

Initiatives by the International Liberal Arts Department in SY2014

2013年度 国際教養委員会

西村諭 橋本みゆき 堀内順治 水本肇 仲沢隆 杉本紀子

### 要旨

本校独自の学習領域「国際教養」は、年度ごとの実践の積み重ねをもとに、開校以来改善や整備を加えてきた。その結果として、「理数探究」(1年)、「Pre Personal Project」(3年)、「Personal Project」(4年)、「国際5」(5年)、「ワークキャンプ」(1・3・5年)の開設・実施やフィールドワークなどは、その運営が安定した方向に向かっている。一方で、開設2年目となる6年生の「国際6」における学習内容の確立のほか、CS活動への取り組みの学年格差など未だ課題も残る。

今後は校内でのカリキュラム評価等の機会を通して、6年間の「国際教養」での学習形態・内容の精査を行っていくことが課題である。

### 1. はじめに

本校における「国際教養」は「国際社会の中で共生・共存する力を育成する」ために設定された学習領域である。「国際教養」には「情報」(前期課程)や「LE (Learning in English)」(前期課程)、「第2外国語」(後期課程)・「GI (Global Issues)」(後期課程)など、教科に委ねられている科目もあるが、「人間理解(道徳)」(前期課程)や「Personal Project」など、学年や学校全体で運営する科目(時間)も含まれている。本校ではこれらの科目・時間が相互に結びつき、他の教科目とも関連しながら、生徒一人一人が豊かな教養や学力を身に着けることを目標にしている。

2013(平成25)年度は開校7年目を迎え、1年生から6年生までの全学年がそろって2年目となった。特に6年生に関しては、昨年度の実践を検証しつつ、「社会への提言」をキーワードに、6年間の集大成としてどのような形でこれまでの学びをまとめるかを検討しながら進めていった。結果としては、本校の学びの中核をなす「国際教養」の6年間のつながりと継続をどのように構成するかが、おぼろげながらではあるが、見えてきたように思われる。本号では7年目の各学年での実践を報告し、それぞれの課題と成果を示しておくこととする。

(文責 西村)

### 2. 第1学年(7回生)の「国際教養」実践報告

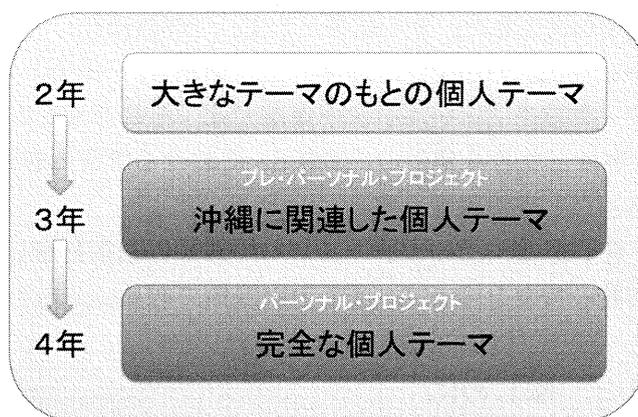
7回生は、情報発信力・情報収集能力・グループワークによる協働コミュニケーション能力の育成を目的とし、ワークキャンプ、スクールフェスティバル、アートフィールドワーク、学

年行事等を位置づけ、企画を行った。「伝えたいことは何か？」を Unit Question とした活動では、主体的な活動を伴ったプレゼンテーションとはどのようなものかを考え、調べたい場所に足を運び情報収集する中で、インタビューの大切さなどを学んだ。また、上級生による CS 活動の講演や各種団体の講演などを聞き、主体的に活動する取り組み方を学んだ。

(文責 橋本)

### 3. 第2学年(6回生)の「国際教養」実践報告

6回生2年の国際教養では、年間テーマを「世界の中の日本を知る」、Unit Question を「How do I express」として学年の実践に取り組んだ。学年のテーマを設定した理由は、4年のパーソナル・プロジェクトでは、完全に個人テーマになり、3年の国際教養ではワークキャンプに合わせて沖縄という大きな枠はあるものの、プレ・パーソナル・プロジェクトという位置づけから、個人テーマが中心となることから、一つのテーマのもとで、お互いの関連を意識しながらも、同じテーマでも多様なとらえ方があることを認識できる数少ない機会を提供できるからである。また、本校国際教養



の3本の柱である「国際理解」、「人間理解」、「理数探究」との関連が明確となるように、以下のサブテーマを設定した。

- 人間理解分野 世界の中の日本経済
- 国際理解分野 日本の文化とその発信・影響
- 理数探究分野 世界における日本の科学技術と科学貢献

活動の結果は二つのタイプの異なるプレゼンテーションの場を提供することにより、グループ活動と個人での練習ができるよう設定すると共に、文書形式でのまとめの学習も行った。2学期のスクールフェスティバルでは、関わりのあるテーマ設定をした生徒を6つのグループに分け、グループ内でお互いのテーマ紹介後、ディスカッションにより発表用に一つのテーマに集約し、スクールフェスティバルのグループテーマとした。具体的な6つの発表テーマは以下の通りである。「日本食を食べる」、「Mystery of technology」、「ミラクル ISS」、「Japan Z World」、「バリアフリーRight Now」、「世界の Children」。それぞれは世界の中における「日本の食」、「日本の科学技術」、「地球で起きている出来事をクイズ形式でプレゼン」、「日本と世界の過去と現在の対比」、「世界と日本のバリアフリー比較」、「日本に入り込んでいる児童労働による食品」について、発表を行った。

2学期のスクールフェスティバル後は、個人による発表を“Research X Battle”という取り組みで行った。この取り組みでは、個人が1学期から取り組んできたテーマのまとめとそのプレゼンテーションとを実施しながら、他の人の発表の評価できるよう、評価シートを作成し、予選、決勝という対戦形式で実施した。特に次年度の沖縄ワークキャンプも見据えて、フィールドワークを取り入れ、書籍やネット上では得られない情報の取得についての取り組みを組み入れた。

冬休みには、“*Book Review on Okinawa*”という名のもと、全員が沖縄に関する本を3冊紹介する課題を出し、人間理解、国際理解、理数探究に関わる本を一冊ずつ取り上げ、本の概要と書評を紹介することに取り組んだ。当然重複する書籍もあるが、のべ342冊の書籍が紹介された。これらは *Okinawa Book Review 2014* として、一人ひとりに配布され、その後のテーマ設定、研究活動に活用された。

3学期には、2学期から引き続き、“*Research X Battle*”の取り組みを実施すると共に、次年度の沖縄ワークキャンプおよびプレ・パーソナル・プロジェクトに向けて、“クイズ！沖縄王”、沖縄コンベンションビューローの方による講話とエイサーの演舞、沖縄に関するテーマ決定前の事前学習” *Introducing Okinawa* “を通してのポスターおよび口頭発表、3年生（5回生）によるプレ・パーソナル・プロジェクト発表会を実施した。

“クイズ！沖縄王”では、*Unit Question* を「*What is a good question?*」と設定し、沖縄ワークキャンプやプレ・パーソナル・プロジェクトの土台となるような基本的知識を身につけること、より良い質問のあり方について考えること、チームで協力しあうことでコミュニケーションや仲間との関係を考えることを目的とした。

“*Introducing Okinawa*”では、学年全体でブレイン・ストーミングすることで、より多くの調査可能なテーマを発見すること、実際に *Research Question* として様々なテーマで考えてみることで、深みのある *Research Question* とは何であるかを追求すること、ランダムに配属された分野で活動することで、自分では選ばなかったかもしれないテーマと出会い、視野を広げることを目的として実施した。

上記学年独自の取り組みに加えて、1学期から夏休みにかけて、数学科との連携で「統計グラフコンクール」に取り組み、進路指導部会との連携で、ジュニアインターンシップに取り組んだ。2学期には外国語科との連携のもと、世界の多くの学校で活動を繰り広げている、英語劇を通して英語教育を行っている *White Horse Theatre* による英語劇鑑賞、国語科との連携で日本文化探訪として、鑛仙会能楽研修所にて、狂言（柿山伏）鑑賞とともに、狂言方の指導の下、全員で語りや声をそろえての謡（うたい）の練習を行い、日本の伝統文化に触れ、江戸東京博物館では、常設展示とともに、開館20周年記念特別展「明治の心～モースが見た庶民のくらし」を見学し、外国から来た学者の目を見た、当時の日本文化を、学年テーマと結びつけて見学した。

MYPと関連した国際教養のもう一つの内容であるCS(*Community Service*)活動では、個人のCS活動に加え、本校古家先生による講演「地雷原をグリーンベルトに」、3歳以上18歳未満の、難病と闘う子どもたちの夢をかなえる取り組みを支援している *MAKE-A-WISH of JAPAN* の大野寿子さんの講演などを開催し、生徒の視野を広げる取り組みを実施した。

学期	取り組み	国際教養の柱			MYPとの関わり				
		国際理解	人間理解	理数探究	学習の姿勢	様々な環境	健康と社会教育	コミュニティーと奉仕	人間の創造性
1 学期	国内ワークキャンプ概要	○	○	○	○	○	○	○	○
	プレ・パーソナル・プロジェクト概要								
	プロポーザル作成								
	個人研究推進								
5 夏 休 み	統計グラフコンクール			○	○	○			○
	ジュニアインターンシップ	○	○		○			○	
	スクールフェスティバル準備	○	○	○	○		○	○	○
	日本文化探訪		○		○				○
2 5 3 学期	スクールフェスティバル発表	○	○	○	○		○	○	○
	講演「地雷原をグリーンベルトに」	○	○		○		○	○	○
	講演「MAKE-A-WISH」	○	○		○		○	○	○
	Research X Battle	○	○	○	○	○	○	○	○
	Book Review on Okinawa	○	○	○	○	○	○	○	○
	クイズ沖縄王	○	○	○	○	○	○	○	○
	Introducing Okinawa	○	○	○	○	○	○	○	○

図 年間を通じた国際教養での取り組みとMYPとの関わり

(文責 堀内)

#### 4. 第3学年（5回生）の「国際教養」実践報告

中等3年生の国際教養では、国内ワークキャンプを含めた「Pre Personal Project(以下PPP)」を活動の軸として進められている。2013年度の第3学年（5回生）も昨年度に引き続き、沖縄をフィールドとした調査活動を11月のワークキャンプでおこない、生徒一人ひとりが3学期の発表会に向けて、1年間探究活動に取り組んだ。

PPPの活動は、4年次に実施される「Personal Project(以下PP)」の前段階であり、継続しておこなわれてきているが、これまでの教員の尽力により、目的や実施の方法について、すでに指標となるものが多くの部分であった。また、他の教員のアドバイスや助力を頂きながら進められたため、必要な準備と活動を展開することができたと思われる。

2013年度の第3学年（5回生）は学年の中で、主にPPPに関わる「国際教養係」と、沖縄ワークキャンプに関わる「旅行企画係」の2つの係に分かれて進めた。両者が連携を取りながら、11月の沖縄ワークキャンプと3学期のPPP発表会が充実したものとなるよう、必要な準備と企画を展開した。年間の国際教養の活動を次の[図1]に示し、続いて5回生が取り組んだ国際教養の活動の中でも特筆すべき活動を記す。

東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要

月	活動名	目的	活動内容
4	国際教養概要 PPPオリエンテーション	第3学年を始めるにあたって国際教養の目的や活動内容を理解する。	プレパーソナルプロジェクトの概要やプロポーザルの説明。沖縄WCを含めた、国際教養全体のガイダンス。
	国内ワークキャンプ(沖縄WC)概要 司書教諭講話 教員講話	11月の沖縄ワークキャンプのイメージを持ち、PPPの研究にも重要な学習活動の一環であることを理解する。沖縄の取り巻く社会問題や歴史について講話を聞き、PPPや沖縄WCに取り組む上で必要な姿勢や態度を考えさせる。PPPを進める上で必要な情報収集やレポートの書き方を学ぶ。	11月実施の沖縄ワークキャンプについて概要の説明 司書教諭による論文の書き方や情報収集の方法、参考文献の書き方について講話 社会科の教員から、沖縄について講話 講師:本校司書教諭 渡辺友理子教諭 本校社会科教諭 古家正暢
	PPPのテーマ決め フィールドワーク先の調査	フィールドワークのインタビュー場所や調査場所をどこにするのか、何を知りたいのかを考えることを通して、事前の調査の必要性を知る。	プロポーザルの作成を進めながら、沖縄WC時のフィールドワーク場所の調査と選定を行う。
5	プロポーザルの完成 SVとの面談	テーマの設定や調査方法について検討を重ね、プロジェクトの質を高める。	プロポーザルの完成を目標に、スーパーバイザーからチェックを受ける。作品の形態や調査方法などについても、見通しやプランが妥当かチェックを受ける。
	「旅立の島唄～15の夏～」映画試写会 映画上映後、講演会 (旅行企画係)	映画を通じて沖縄のイメージを広げ、また、と離島という事実について知る。また、沖縄出身の方や沖縄に関する仕事に携わる方から直接考えや意見を聞くことで、知識を広げる。	「旅立の島唄～15の夏～」の上映会。試写会後に沖縄出身の方、沖縄に関わる仕事をされている方を招いて講演会を行う。携わ者:配給会社ビクターズエンド、沖縄タイムス、琉球放送 おきなわ離島応援団・今井恒子さん 沖縄県東京事務所:OCVB名幸さん
	分野別ディスカッション	分野内で情報共有とディスカッションをおこなうことで、必要な準備や調査について考えを深める。	分野ごとに分かれて研究テーマや訪問したいFW先の共有とディスカッションをおこなう。ディスカッションをすることで互いのプロジェクトに不足している情報や調査などを確認する。
6	フィールドワークのグルーピング フィールドワーク先の検討	プロジェクトに必要な調査をするのに適したフィールドワーク先を探すため。	フィールドワーク先として考えている場所が近い者でグループを組み、情報共有する。
	スクールフェスティバルに向けて スクールフェスティバルでの発表 チームごとに内容の検討	前期課程の最終学年として、どのような発表を目指すか考える。	SoFでどのような発表をしたいか企画を募る。集まった企画をSoF企画係で検討し、決定する。
	PPP夏休みの課題提示 インタビュー内容の考案 フィールドワーク先の決定	11月のワークキャンプに備え、フィールドワーク時の班別行動のプランや訪問先のインタビュー内容について考える。	演劇、授業発表、PPP発表の3つのチームごとに発表形態や内容について話し合いをする。
7	スクールフェスティバルに向けて チームごとに準備	演劇、授業発表、PPP発表のチームごとに工夫と改善を重ね、本番に備える。	それぞれのチームで必要な準備と練習を進める。
8	夏休みの課題、調査活動 スクールフェスティバル準備	図書館や書籍、ネットなどで必要な調査を進めることで、PPPの質を高めるため。夏休み中に学校でSoFの準備を行い、本番に備える。	夏休みを利用して、図書館などの施設を利用してPPPの研究を進める。また、SoFでの発表チームごとに学校で練習、発表の質を上げる。
9	PPPポスター展示の準備、リハーサル スクールフェスティバル振り返り PPPポスター優秀者表彰	スクールフェスティバルでの発表に備えるため。個人とチームとで振り返り、反省を行い、次への課題を確認する。	SoFの発表チームごとに作業、それぞれでリハーサルを重ねる。全体と個人の両方で振り返りと反省を行う。また、PPPポスターの優秀者の表彰をおこなう。
	ホテルの部屋割り、バスの座席決め 民泊の班決め	沖縄ワークキャンプ準備。	
10	FW先へインタビュー質問状とお手紙の作成	社会的なマナーを学ぶ	インタビューする各施設の担当者にお手紙を書く。
	インタビューの仕方と心得	インタビューの方法について学ぶ。PPPの研究としてだけでなく、お世話になる沖縄の方との交流が互いにとって充実したものとなるよう、マナーや取るべき態度等を学ぶ。	インタビューをする上で必要なスキルを学ぶ。言葉づかいや質問をする上で失礼のない表現をあらかじめ準備する。
	PPPディスカッション準備 PPPディスカッション	調査してきたことを再整理し、議論を通して自分の研究に還元する。インタビューで取り上げる質問事項の質の向上を図るため。	1チーム5人で、分野を混ぜてディスカッションをする。司会者、発表者と役割を設定し、参加者は議論した内容を記録したものを発表者に切り取って渡す。
11	フィールドワークの行程の最終確認 インタビューの質の向上	班別フィールドワークの行程確認とインタビューの準備。	各班でインタビューの練習。フィールドワーク行程の最終確認。
	しおり読み合わせ	沖縄ワークキャンプ準備。全行程と注意事項の確認。	学年集会を開き、しおりの読み合わせと必要な持ち物、注意事項等の確認を行う。
	民泊先と訪問したFW先へのお礼の手紙(色紙)の作成	社会のマナーを学ぶと同時にワークキャンプを振り返る。	感謝の意を手紙に綴る。教員の添削を受ける。
12	ワークキャンプとフィールドワークをふまえてグループディスカッション	沖縄ワークキャンプとフィールドワークでの調査やインタビュー結果を踏まえて、情報の共有とPPPのゴールを見直す。	分野内の班ごとにフィールドワーク時の調査とインタビュー結果を報告し合い、プロジェクトの最終段階に向けて議論を深める。
	冬休みの計画 PPP3点セットの提出について 報告レポートの書き方について	PPPの最終段階を迎え、作品や報告レポートが中途半端なものにならないようにする。	PPPの3点セット提出に向けて冬休みの計画を立てる。
	PPP作品提出・相互評価 報告レポートの体裁について プレゼンテーションの発表形態について 「パワーポイント用いた説明の仕方」講習	完成度の高いレポートを目指すため、互いの報告レポートを読み、相互に評価をする。 PPP発表会でのプレゼンテーションの質を上げるため。	互いの報告レポートを読み、添削をする。それを受けて、報告レポートの更正をおこない、完成度を高める。 パワーポイントを用いた良いプレゼンの仕方と悪いプレゼンの仕方について学ぶ。
2	ワークキャンプ班別行動時の情報共有 (旅行企画係)	沖縄ワークキャンプとフィールドワークを改めて振り返り、情報を共有する。PPP発表会に向けてモチベーションをあげる。	沖縄ワークキャンプのスライドを流し、全行程を振り返る。
	プレゼンテーション準備	PPP発表会の準備のため。	分野ごとにリハーサルを行う。
	PPP発表会 3点セット最終提出 6回生に向けてPPPプレゼンテーション 4年PPJに向けて	これまでの研究の成果を発信するため。後輩にPPPについて知ってもらうため。 パーソナルプロジェクトの準備。	3教室に分かれて発表をおこなう。生徒の持ち時間は一人6分間、質疑応答2分間、3コマ分の時間を使って発表会をおこなう。発表最終日には6回生を招いて発表をした。 ガイダンスを聞き、パーソナルプロジェクトのテーマを検討する。
3	徳末明子さんキャリア講演会	後期課程を目前にし、進路やキャリアについて考えるため。国際理解の視点から、国際協力の仕事について知るため。	講演者の徳末さんから、仕事に就くまでの経緯と、アフリカのエチオピアの農村女性支援に携わった経験をふまえて国際協力という仕事について、講話を聞く。
	前期課程Self-assessment 自己評価書作成	前期課程を終えるにあたり、これまでの学習や活動を振り返る。後期課程に向けて、自分自身に必要な課題や身に付けるべきスキルを明確にする。	自己評価書にこれまでの実績や活動、達成できたMYPの学習者像やAOIの5領域について記入する。
	第4学年(4回生)PP発表会	パーソナルプロジェクトの準備	パーソナルプロジェクトにおけるテーマ・手法について多角的な視点から参考にする。

図1：2013年度 第3学年（5回生）国際教養実践一覧

## 1 学期の活動

4月の新学期期間では、PPPのオリエンテーションをおこなったり、本校の司書教諭に論文の書き方や参考文献の書き方、資料収集の方法について講話いただいたりした。その後の活動は主に、生徒一人ひとりが選択したPPPのテーマを分類したグループごとに、フィールドワーク先の調査、インタビュー内容の考案などをおこなった。

この間、旅行企画係の主催による、沖縄の離島をテーマにした映画の試写会が企画・実施された。上映された映画は「旅立の島唄～十五の春～」というもので、生徒の沖縄に対するイメージや知識、あるいは沖縄の現実の一部を知る機会となった。また、一般公開前の映画を鑑賞できるということも、生徒にとって大変新鮮で貴重な体験となった。

さらに、映画の試写会后、「旅立ちの島唄～十五の春～」の映画監督や離島出身の学生の方、沖縄離島応援団の方、沖縄観光コンベンションビューローの方など、沖縄にゆかりのある方々を招いての講演会もおこなわれた。実体験に基づくお話しや、沖縄に対する想い、沖縄の取り抱える問題に対する考えなど、貴重な意見を伺うことができた。

## 2 学期の活動

2学期の主な活動は、11月のワークキャンプに向けて、生徒一人ひとりが調査を続ける他、ディスカッションを通じてインタビュー内容の質を高め合った。

9月中旬のスクールフェスティバル（以下 ScF）はPPPの研究の経過報告をおこなう良い機会である。経過報告は展示と発表の2通りの方法でおこない、展示は国際教養係が中心となって活動をした。

展示は、学年の生徒全員が夏休みの課題で作成したPPPポスターの展示である。生徒が互いにどのような研究をしているかを知ることができ、また、生徒の保護者や一般のお客様の目にも触れることができた。さらに、気に入ったポスターに投票してもらうことで、なるべく多くのポスターを見てもらえるよう工夫をした。優秀なポスターを作成した生徒にはScF後の国際教養の時間で表彰をおこなった。

2つ目は、国際教養・PPP発表チームを作り、テーマが近い分野同士でグループを組み、沖縄の諸問題とその解決方法について、プレゼンテーションをおこなった。生徒は、お客様がただ発表を見る、聞くだけでは大事なことが伝わらないと考えたため、「参加型の発表」を目指した。発表内容や方法に議論が重ねられ、少しでも参加者の印象に残せるよう努力した。

発表の場としては、多少内輪向きではあったが、保護者の方々や一般のお客様に向けて発信することはできたと考える。

## 3 学期の活動

2学期末より、PPPの研究に必要な作品、プロセスジャーナル、報告レポートの作成について指導をおこなった。また、発表に向けてパワーポイントの見やすさや、パワーポイントを用いたプレゼンテーションについても指導をおこなった。

PPPの発表は学年内でおこなったが、一つ下の学年の6回生を招いて発表する機会もあったことは、5回生が最後まで緊張感を持ってPPPに取り組める良い機会であった。

また、3学期末には国際NGO 笹川アフリカ教会の方を招いてキャリア講演を実施した。高校時代から大学、そして笹川アフリカ教会に就職されるまでのお話しや、国際的な仕事に就く

ということについてお話しいただき、生徒が進路や将来を考える良い機会となった。特に、グローバルな仕事に就くということについて、5回生がその可能性を考えたり、視野に入れたりする上で必要な講話であった。

(文責 水本)

## 5. 第4学年(4回生)の「国際教養」実践報告

本実践は2013年度の第4学年(第4回生)の「国際教養」の記録をまとめたものである。本校はIBのMYPを導入して7年目を迎えた。第4学年はMYPの最終学年にあたる。MYPの最終学年にはPersonal Project(略称PP)という活動が組み込まれており、このプロジェクトを終了することがMYPの集大成ともなる。今年度もこの活動を中心に4学年の国際教養の学習を展開した。

### 5.1 パーソナルプロジェクトについて

パーソナルプロジェクトは名称を見る限りこれまで行われてきた「課題研究」「個人研究」「卒業研究」と類似した取り組みであるような印象を与える。個々の生徒が課題を設定して取り組む活動であり、国内の既存の取り組みと非常に近い側面もあるが、IBの教育理念・MYPの理念が色濃く見える学習である。一般的にイメージする「個人研究」との違いは、そのためにガイドが用意されることにもみられる。パーソナルプロジェクトについては、IBが独自にガイドを発行しており、目的・指針・評価項目・評価方法がIBによって定められている。本校ではそれらを参考にしながら独自のガイドを作成し、生徒に配布している。また、プロジェクトについての振り返り(取り組み後だけでなく取り組みの最中の振り返りも含む)が非常に重視されているのもMYPの特徴である。

さて、PPの特徴はまず、相互作用のエリア(AOI)に焦点を当てよと強調しているということである。AOIとは、「学習の姿勢」「多様な環境」「健康と社会教育」「コミュニティと奉仕」「人間の創造性」の5つの領域を指し、MYPにおける学習(教科学習を含む)は、この5領域を通して、相互に関連・影響しながら生徒の力を育むことが目指されている。このAOIの一つ以上に焦点を当てるには、自分の課題意識と別の何か(社会問題・現象など)との関係性を考えたいうえで、それらがその領域とどう関連するかを自分なりに見出さなければならない。これは、プロジェクトとして不適切なものに「特定の教科と密接に関わりすぎているもの」が挙げられていることにも見て取れよう。すなわちPPは単独の教科の試験問題や演習問題を解くようなレベルのものであってはならず、それが別の対象(課題・社会・世界)とどう結びついているかが見えるものでなければならないのである。

また、PPは学習者の独自性と強い意欲を求めている。「本当にやりたいこと」でなければならず、「オリジナル」のものでなくてはならないという条件は、実は高校1年生(本校4年生)段階の生徒にとっては設定が難しい。単純に好きなことややりたいことはあるだろうが、それが「オリジナル」であるかどうかというのは、ネット社会であらゆる情報が氾濫する現代においては判断が難しい。また、自分がやりたいことや好きなことが他の対象や分野、社会や世界とどのようにつながっているかを見出し、明確なゴールを設定しなければならないわけであるから、真剣に取り組むにはそれなりの覚悟が必要である。「学校の授業だから仕方ない」というレベルの意欲ではプロジェクトを修了することはできないということである。

## 5. 2 4回生のテーマと実践

では、4回生はどのようなテーマを設定し、プロジェクトに取り組んだのか。ここでは4回生のプロジェクトのうち、2013年度末に「Personal Project賞」(PP賞)を受けた生徒を含め、いくつかのプロジェクト名を紹介しておきたい。

滝沢 梨花 「児童労働を撲滅しよう」(PP賞)

小松原英莉 「『あそび』を『まなび』に～幼児の発達と反対語概念の習得～」(PP賞)

奥井 祐貴 「確実性・効率性・利便性・分かりやすさの調和がとれた列車の運行計画とは何か」  
(PP賞)

丸山 夏大 「ポップスでリラックス」(PP賞)

井上 山太 「高齢者がパソコンを活用できる環境とは」

田邊 怜 「海外で役立つカタカナ言葉辞典を作る」

原田 大暢 「ロゴによる意思伝達」

小笠原知樹 「人の心を動かすデザイン」

佐野まり沙 「家の空間とコミュニケーション」

古作 優美 「ゲーム理論を使って値下げ交渉をしよう」

蔦 美梨紗 「誕生の記憶」

下村 信行 「子どもが政治介入するにはどうすればよいか」

(文責 西村)

## 6. 第5学年(3回生)の「国際教養」実践報告

### 6. 1 「国際5」について

第5学年は、MYP修了後の学年となる。そのため本校でも文部科学省の教育課程上の「総合的学習の時間」を「国際5」という名称で開設している。ただし、「国際5」は六年一貫の流れを鑑みて設置されたものであり、特に4年次のパーソナルプロジェクトや5年次に行われる海外ワークキャンプとの関係、あるいはその後の6年次の国際教養のあり方との関係性を強く意識しながら運営する必要があった。以下に、開設時のねらいと指針を挙げておきたい。

#### 開設時の指針

##### (1) 国際教養に関する確認事項

##### 【国際教養の目標】

- ① 第5学年終了時に英語を用いて多様な人々と議論(ディスカッション)できる力を育成する。
- ② 人間理解・国際理解・理数探究の領域から現代的な学習課題にアプローチし、探究する力・論理的に思考する力・プレゼンテーション活動を中心として表現する力を育成する。
- ③ 国際教養の学習で獲得した力を、将来的に様々な場面で発展的に活用していくことができる態度と行動力を育成する。

##### (2) 第5学年「国際5」の本校教育課程上の位置づけ

高等学校学習指導要領に示されている「総合的な学習の時間」を第5学年「国際5」として開

設する（ちなみに4年次のパーソナルプロジェクトも総合的学習の時間の扱いであり、校内では「国際4」として開設されている）。また「国際5」は1単位とする。

### （3）学習内容

生徒一人一人が、第4学年までの学習やパーソナルプロジェクトでの成果等を踏まえ、進路を意識しながら、興味関心のある学習領域群（人間理解・国際理解・理数探究）の講座を選択し、その中で自己の課題を設定する。

各講座において議論することを通して論理的思考に基づく発信力を高めていくとともに、客観的に自己の課題を見直し、問題意識を深めていく。

課題研究の学びの成果を積極的に外部に発信する。…スクールフェスティバル、外部のコンテストなど

各学習領域群において、学習領域討論会、中間報告会等の活動を位置づける。

年度末には校内にて課題研究発表会（仮称）を実施する。

### （4）支援体制

① 学習領域群（人間理解・国際理解・理数探究）のバランスを踏まえ、専門的な指導を展開できる担当教員を配置する。・・・4年PPのSVとは異なる

② 生徒は3つの学習領域群のいずれかを選択する。それぞれの学習領域群で担当教員が設定したいずれかの講座に属し、担当教員の指導・助言に基づいて自分の課題学習テーマを設定し、1年間継続的に研究に取り組む。

③ 外国語での議論（ディスカッション）及び研究のまとめが進められるように外国語科の教員が指導に加わる体制を整える。

### （5）開設の仕方

・ それぞれの講座で議論できるような大テーマを設定する。その大テーマに関わる小テーマを各自が設定し、学年末に探究活動のまとめ（論文、作品など）提出する（いずれの場合も英語による要旨を添付）。

・ 生徒の希望する学習領域および仮テーマ（4年次3学期に調査）を参考に、国際教養委員会が担当教員12名のうち各学習領域にそれぞれ何名の担当教員が必要かを定める。

・ 5年学年担任6名を含める。海外フィールドワーク事前・事後の指導に「国際5」の時間を当てられるようにするため。

### 実際の講座

前掲のような指針のもとに開始された「国際5」であったが、実際にはなかなか「討論」をその活動に盛り込むことが難しい講座もあったようである。また、海外ワークキャンプを念頭においての英語によるディスカッションの訓練を行うには、教員・生徒双方の準備や意識不足もあり、一部の講座でしか行えなかった。しかし、教員・生徒共に手探りではあるが、それぞれの講座で課題を設定しては討論や作品制作を行うという活動を繰り返した。こうして生徒たちは1年間をかけて他者と課題を共有しながら個人の問題意識を持ち続け、小さな課題の解決を基礎として大きな課題の解決や作品完成に向けて学習活動を継続した。以下に2012年度の開設講座を挙げておく。なお、担当者は2012年度段階で本校に在籍していた教諭である。また、「領域」とは本校が独自に設けている教育の指針としての三つの領域「国際理解」「人間理解」「理数探究」を示す。

これらの講座での学習成果は2014年3月の活動報告会において、2014年度履修予定の4年生と参会者に向けて発表した。5年生全員の生徒が「国際5」の発表を行ったが、いずれも丁寧に自分たちの研究成果・研究過程について発表を行い、4年生にとっては大いに参考になったようであった。また、一部は2014年6月の公開研究会において、3年生のPPP、4年生のPPと共に参会者に向けて発表し、多くの参会者から高い評価を得た。

発表した生徒たちの中には、進路的には理系を選択していたが、自分自身の意志で、視野を幅広く持つことや学問領域相互の影響関係を鑑みて文系の「人間理解」や「国際理解」の講座を選んでいる生徒もおり、こうした生徒の学習活動や姿勢を通して、生徒自身の中でMYPの時期からの「AOI」の意識や学際的意識が強まっていることを感じさせられた。

	担当教科	領域	講座名
A	外国語	国際理解	地球家族—世界30か国のふつうの暮らし
B	理科	国際理解	スポーツを通じた国際交流を考える
C	数学	国際理解	COOLJAPAN～なぜ日本の文化が外国人に共感を呼ぶのか？～
D	国語	人間理解	日本の伝統芸能
E	技術家庭	人間理解	表現と伝達
F	社会	人間理解	「場」づくりのプロになる～ファシリテーター入門講座～
G	外国語	人間理解	宗教を考える
H	技術家庭	人間理解	放射線に負けない食生活
I	情報	理数探究	システム開発
J	数学	理数探究	数学を用いた創造的問題解決 I
	数学	理数探究	数学を用いた創造的問題解決 II
K	理科	理数探究	国際生物オリンピックに挑戦しよう！

5年 図1 2013年度「国際5」開設講座一覧

(文責 仲沢)

## 7. 第6学年（2回生）の「国際教養」実践報告

### 7. 1 6学年時の「国際教養」について

第6学年において「国際教養群」に開設されている時間・科目は次の通りである。

- ・「国際6」（「総合的学習の時間」）
- ・「国際A」（2単位：学校設定教科「国際教養科」内、学校設定科目）
- ・「国際B」（1単位：学校設定教科「国際教養科」内、学校設定科目）

このうち、「国際A」「国際B」に関しては、科目内にいくつかの講座を設け、生徒が前年度の履修科目登録時に選択できるようにしている。それらの講座は、既存の教科の枠にとらわれず、包括的な学びを意識して開設することを条件としているが、担当する教員の研究分野・専門分野の特色がよく表れている部分もある。2013年度の開設講座は以下の通りである。

- ・「国際A」：講座「憲法と人権」
- ・「国際B」：講座「近代小説講読」「応用数学」「APチュートリアル」

履修者は多数ではないが、大学入試にこだわらず、幅広く学びたいという意識を持つ生徒が履修している場合が多い。開設講座に関しては年度ごとに各教科・教員に開設希望を募って決定しているため、年度によって変わる場合もあるが、2012年度から現在（2014年度）までは変更していない。

「国際6」は文部科学省の教育課程上の「総合的な学習の時間」に相当する。2013年度の企画・運営に関しては、昨年度の反省を踏まえ、生徒の進路や将来の社会生活への展望を鑑みて国際教養委員会と学年担任が実質的運営にあたった。また昨年度は生徒主体で企画運営させる部分を設けようとした結果、そのモチベーションや興味関心の差に起因して結局のところ研究的な成果を十分に残せなかった生徒もいたことを踏まえ、最終的に「社会への提言」を作成するという目標を教員側で提示し、その提言を作り上げるプロセスを学習活動の軸に据えた。

### 7. 2 実際の授業と活動

「社会への提言」は社会に目を向け、現実的な問題を見いだしていなければならないことである。よって「国際6」ではまず自分たちの社会にどのような問題を感じるか、どのような問題が今重要なのかを発見することから始めた。生徒の興味・関心問題意識はかなり幅広いものではあったが、第1段階としては彼らが関心を寄せる問題を一定の共通項でまとめてグループ化し、その中で最も重大な課題や解決すべき問題を話し合わせ、解決策を考えさせることとした。

第2段階（最終段階）は個人あるいはグループで、再度解決すべき課題・問題を設定して、研究・考察を行い、「社会への提言」として日本語・英語の2カ国語を使用して文章にまとめ、学年内でプレゼンテーションを行った。

以下に、4月当初の段階で生徒に示した資料・情報を掲げる。

□ 6年次の国際教養の目標と学習内容

5年次の目標は・・・

- ・異なる文化・環境を持つ他者と英語でディスカッションすることができる。

6年次の目標

<5年次までの経験をもとに…と考えると>

- ・社会にとって意義ある問いを立て、それに対して何らかのアクションを起こすことができる。(→パーソナルプロジェクト、探究的活動の経験がもとなる。)
- ・母語でも外国語(主として英語だが、第2外国語等も含む)でも、異なる文化、背景を持つ他者と自分たちの社会の「課題」について対話し、相互協力体制を築くことができる。(→プレゼンテーション・ディスカッション他様々な場面でのコミュニケーションの経験がもとなる。)

6年次の学習内容

- 自分の進路を考えるに際し、様々な現実社会の事象・問題と関連づけて考える機会を持つ(企業訪問・社会人講話など)。
- より現実的な社会の諸問題・諸相に触れる(フィールドワーク・社会人講話・時事問題についての調査・討論など)。
- 校内・校外の人々との討論
- 国際6のまとめとしての小論文やアクションプランの作成
  - ・自分の興味関心のある分野や課題と社会との関わりを見つけ出す。
  - ・志望や進路をあらためて考える機会とする。
  - ・書いた文章を審査・査読される機会を持ち、「他者」に読まれることを意識する。
  - ・社会的な課題を設定し、自分たちにできることやこれからの社会で取り組まねばならないことを「提言」としてまとめ、政府・企業などに送る。

次に、4月当初の段階での問題設定の材料として生徒に記入させた調査用ワークシートを掲げる。

課題①

(1) 今、あなたが関心を持っている社会の問題・現象は何か。

その問題・現象に—

- ・関連する領域は? 国際理解 ・ 人間理解 ・ 理数探究
- ・関連する学問領域は?

1 人文科学(哲学・宗教学・教育学・心理学・社会福祉学・文学・人類学・考古学・歴史学・地理学・芸術学・言語学・言語)

2 社会科学(政治学・行政学・経営学(ビジネス・商学)・法学・経済学・社会学・地域研究)

3 自然科学(形式科学)(数学・コンピューター科学・システム科学)

- 4 自然科学（物理学・化学・生命科学・生物学・医学・看護学・薬学・歯学・地球科学・宇宙科学・天文学）  
 5 応用科学（図書館情報学・応用芸術・デザイン・軍学・軍事学・農学・工学・建築学・交通科学・家政学・メディア研究・ジャーナリズム）

(2) その問題・現象と自分（自分の生活）にはどのような関わりがあるか。

(3) その問題は、現在の社会・未来の社会にどのような影響を及ぼす可能性があるか。

これらの調査の結果を踏まえて、第1段階は次のようにグループを分けた。もちろん全ての生徒の個人的関心を網羅できていた訳ではないが、このグループの中で意見・考えを共有し、その分野の問題で解決すべき問題を問いの形で考えさせた。

グループ	テーマ	人数
A	北朝鮮問題（ミサイル・核・軍事力）	10
B	領土問題、外交・紛争	10
C	宗教問題、イスラエル・パレスチナ問題	5
D	教育問題	8
E	科学技術の抱える問題・未来・宇宙	12
F	文化	11
G	言語	4
H	医療	7
I	心理・人の行動	14
J	少子高齢化	4
K	生物・自然・環境	6
L	経済	8
M	法	10
N	国際協力・国際関係	8
O	いじめ問題・自殺問題・人の生死	8

また、生徒には以下のような指示をペーパーで配布し、記録は自分たちでとらせた。

**課題②**

グループ名 ( )

(1) 各自が課題①で挙げた関心のある社会問題とそれについて知っていること・そのことについての自分の疑問を同じグループの人と共有してください。ただし、複数の問題を挙げた人は、今回所属しているグループに関連する問題について発言すること。メンバーが挙げた問題・現象を記録しておいてください。

(2) 所属しているグループのテーマに関連する問題のうちで、社会にとって最優先とすべき、あるいは社会にとって価値ある課題を「問い」の形で提示しなさい。グループで一つ。補助的な問いをつけてもよい。できれば「なぜ」「どうして」「どのように」「どのような」といった表現を使うこと。YES/NO・有/無で答えるような問でない方がよい。枠内に文で書いてください(単語の羅列で表記しないこと)。日本語・英語を併記すること。

(3) 次回までにその「問い」に対する答えを見つけるための手段・方法・ヒント・材料となるものを各自で考え、集めてきてください。

上記のような活動を出発点として、「国際6」1年間の活動を以下のように構成した。原則的に週に1時間(1単位)であるが、模擬試験や学校行事の関係で開講できない週もある。その時間に関しては、試験終了後の特別時間割期間中に複数時間を設定するなどの工夫を行った。

<1学期>

4月17日	進路ガイダンス・国際6オリエンテーション
4月24日	社会問題について考えるI(課題意識調査)
5月1日	海外 Vancouver Work Camp プレゼンテーション準備
5月8日	海外 Vancouver Work Camp プレゼンテーション
5月15日	社会問題について考えるI
5月22日	社会問題について考えるI
5月29日	社会問題について考えるI
6月26日	社会問題について考えるI
7月10日	未来共創塾*
7月12日	進路ガイダンス

<2学期>

9月4日	センター試験説明
9月11日	School Festival 準備
9月18日	School Festival 準備
9月25日	センター試験確認
10月2日	School Festival 振り返り
10月9日	TED プレゼンテーション鑑賞(社会問題について考えるII)
10月23日	社会問題について考えるII
10月30日	社会問題について考えるII
11月13日	社会問題について考えるII

11月20日 社会問題について考えるⅡ

11月27日 プレゼンテーション

12月4日 プレゼンテーション

<3学期>

1月15日 センター試験注意

1月22日 「社会への提言」原稿見直し

1月29日 「社会への提言」原稿最終見直し

(7月実施「未来共創塾」について：「三菱総合研究所」の研究員の方々を講師として、講義および質疑応答・ディスカッションをしていただくことを依頼した。昨年度同様生徒の興味関心をありかを第1段階の事前調査をもとに三菱総合研究所へ知らせ、三講座を用意して頂いた。開設された講座は以下の通り。

\* 科学技術が抱える問題と未来

\* 国際経済～2030年までの中長期経済見通し～

\* 日本の領土に関する最近の動き

生徒の振り分けは、希望調査を行い、教員側で検討・決定した。)

本校では6年生の3学期(1月末)まで通常授業を行っている。勿論「国際6」についても例外ではなく、私立大学の入試が始まっている1月末であっても、大学入学試験当日で不在の生徒以外は上記のように提言の最終確認・推敲を行わせた。このようなやり方には賛否両論あるであろうが、卒業間際までこのように総合的・包括的な視野を持って研究に取り組むことについては、卒業後に学生生活や社会生活を送る中で大きな意義が感じられたようである。

この姿勢は次の学年にも受け継がれており、現在(2014年11月現在)、3回生の国際6においても、2学期終盤ほとんどの生徒が受験を控えて日々学習に励む中で、各自が手を抜かず確実に提言の作成や中間発表(プレゼンテーション)に取り組む姿が見られている。

さて、2回生の活動に関して言えば、第1段階のグループでの討議は一定程度の精度を持った提言にまとめられた。以下に2013年度のSchool Festivalで展示した提言書に掲載された「問い」の一部を掲げておく。

<社会への提言：グループ版(1学期制作分)の「問い」>

グループA：北朝鮮と世界の対比ー日本の行く末「なぜ北朝鮮はこうも不可解なのか？」

グループB：「領土による対立を乗り越えて平和にするには？」

グループC：「宗教とは何か？」

グループD：「現在の日本の英語教育をどのように変革していけば、『使える英語』が身につくのだろうか？」

グループE：「地球の諸問題を解決するために火星をどのように利用できるのか？」

グループF：「How can we preserve Japanese Culture and identity from globalization?」

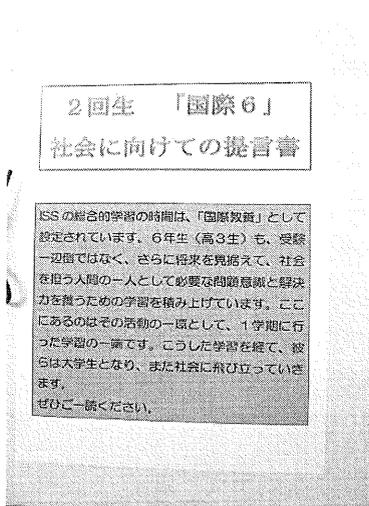
グループH：「若者の骨髄バンク、脳死・臓器移植の認知度を高めるにはどうしたらよいか？」

グループM：「少年法は改正すべきか？」

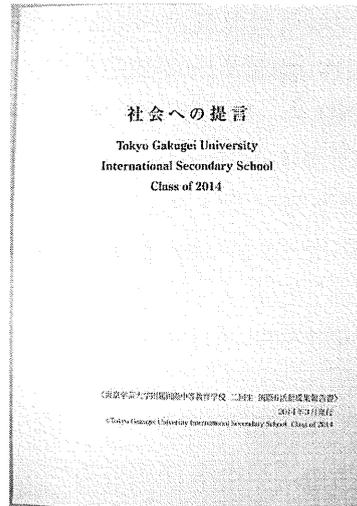
第1段階のグループでの活動の利点は、課題の精査ができることである。同じ分野に関心を持っていても、個人によって具体的な課題意識は異なる。それを取上げてぶつけ合い、何が最も

優先課題なのかについて合意を形成していくプロセスを経験したからこそ、主観や個人的な興味を超えて「解決すべき課題」を「問い」の形にまとめることができたとも言える。

では、第2段階の個人あるいはグループでの活動はどうであったか。実際にはやはりモチベーションや意識の差があったことは否めない。しかし、敢えて高校生の段階で社会への提言を行うという活動には全員が一定の意義を感じていたことは確かであり、それは最終的な提言の「問い」のあり方や原稿の提出状況（2名を除いて全員が提出）に表れている。



(図1 第1段階提言書)



(図2 第2段階最終提言書)

第2段階の活動は個人・グループを含めて全43の提言が作成された。その提言の質や精度にはまだまだ課題があるが、それでも、第1段階の活動を経て、当初の自分の課題意識をさらに具体化したものが増えたようには感じられる。

以下にその提言の問いの一部を掲げておく。なお、「問い」に関してはすべての提言において日本語と英語の両方を併記するように、指示をした。

また、本文が日本語の場合は英語による要旨を、本文が英語である場合は日本語による要旨をつけるように指示をした。

<社会への提言：最終版の「問い」>

- ・ How can the young and old mutually improve each other's lives?  
世代間交流によって各世代の生活・人生をよりよくするには？
- ・ 「SNSで何故馬鹿な行為をしてしまうのか？」  
What drives people to behave foolishly on SNS and how should we deal with them?
- ・ 「遺伝子操作は人々に幸せをもたらすのか？」  
Will genetic manipulation bring happiness to people?
- ・ 深刻さを極めるインフラの老朽化に、長期的にはどう対応していけば良いか。  
What Should We Do to Deal with Aging Infrastructures in Long Term?
- ・ 「日本企業が世界で生き残るためには」 どうすればよいのだろうか？  
How can Japanese enterprise survive in the age of international competition?
- ・ 日中関係を良くするためにはどうしたらいいか？  
How can we improve Japan-China's friendly ties?
- ・ 「日本の子どもの貧困を解決に近づけるためには？」  
What can be done to solve child poverty in Japan?

- ・「なぜ日本の英語教育は訳したがるのか？」  
Why do Japanese English education requires us to translate?
- ・「放射線汚染物質を取り除く方法はないのか？」  
Isn't there any way to remove a radiation contaminant?
- ・「何故臓器提供の意思表示が重要視されるのか」  
Why is a declaration of intention of the organ donation important?

結果としては理数探究分野の提言が少数であったのが残念ではあったが、身近で解決すべき問題とその解決に向けた提言が、第1段階よりは具体化された感はある。この提言は前掲図2のように冊子として作成し、卒業生全員に配布するとともに、大学・関係省庁や団体へ送付した。それには現実の社会に彼らの提言を提示するという意味がある。提言の内容自体は稚拙な部分もあるが、それでも次世代の社会を担う彼らが問題を自分のこととして受け止めて考えているのだというサインを示すことにはなったのではないかと考えている。

(文責 杉本)

#### Abstract

Since the inception of TGUISS, we have made improvements to “International Liberal Arts,” our original area of study, building on the practices accumulated year by year. This effort culminated in the creation of new units including Scientific & Mathematic Inquiry (Year 1), Pre-Personal Project (Year 3), Personal Project (Year 4), International Study 5 (Year 5) and Work Camps (Years 1, 3 and 5). Implementation and field works for these subjects have now stabilized. Various issues remain, however, including establishing the study content of International Study 6 (Year 6), which is still in its second year of implementation, as well as gaps in Community and Service activities between grades.

Looking ahead, we need to seize various opportunities, including intramural curriculum assessment, to take a closer look at the forms and contents of International Liberal Arts studies throughout the six-year programme.